

子どもの育ちと環境との関連性

～体育教師の役割～

福島めばえ幼稚園

石川 直己

1. 研究の動機

近年生活環境(生活習慣・子育て環境)の変化により、階段がスムーズに昇り降りできない、立って靴が履けないなど、歩く経験が少なく子どもが基本運動を獲得しにくい状況が見られる。

体幹(動き始めるときに必要な筋力)が育たず姿勢保持や集中力が短くなり、歩行にバランスを欠き、落ち着きに欠ける面も目立ってきた。

当園では、このような状況を加味し体を動かすことが好きな子ども、楽しめる子どもの育成を目指し環境を整えたり保育内容を組み立てたりしている。長年運動能力調査を行っている。結果からも項目の全国平均との比較を行い、どのような力が劣っているかをとらえ、その力の育成に努めてきた。今回は、運動能力の結果を全国平均との比較からいくつか突出しているか、劣っているか群の散らばりとそれらの子どもの傾向を語彙検査や知能検査を含めてとらえ、体育教師の立場から運動面を窓口に子どもの実態を探る。

2. 研究の目的

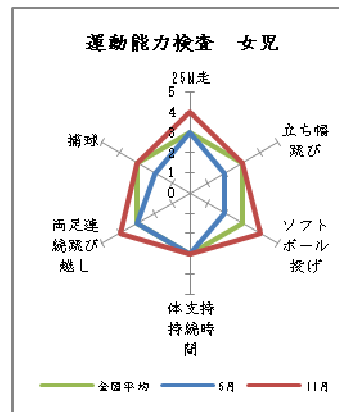
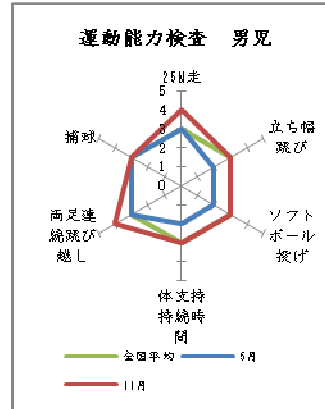
- (1) 運動能力検査や取り組み、それにプラスした日頃の子どもの様子、語彙検査や知能検査の結果からみえる実態を探る。
- (2) 幼稚園生活の中でどんな体験が必要か、どんな経験を育てるか検証する。(個別と集団の肯定感を味わえる経験)

3. 研究方法

子どもの運動能力調査の結果をA～E群(能力別)に分類し、語彙指数や知能指数、友だち関係など総合的に子どもの育ちを見つめ傾向を探る。運動することが楽しい子どもを育てるための取り組みの事例をあげ、環境構成や教師の援助、保護者や担任との連携の在り方や方法を探る。

4. 取り組みの実際

- (1) 今までの運動能力別平均と全国平均のグラフ



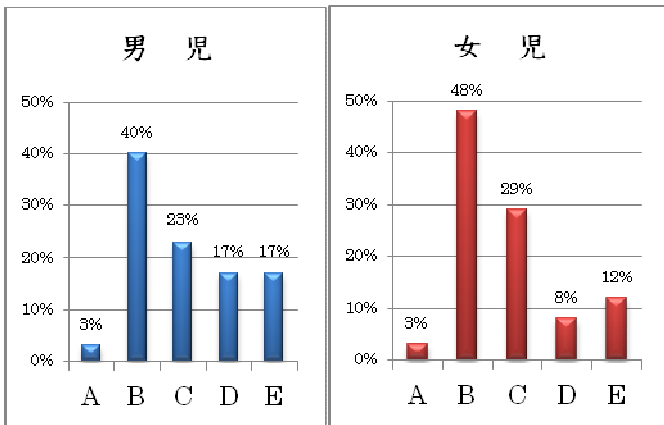
① 読み取りと取り組み

結果から当園の子どもは、投力と体支持力(精神力を含む)が劣っている傾向にあった。そこで投げるスタイルと意欲の育成・筋力や頑張る力の育成を試みて、6項目がバランスよく伸びるよう保育内容や環境の工夫をしてきた。

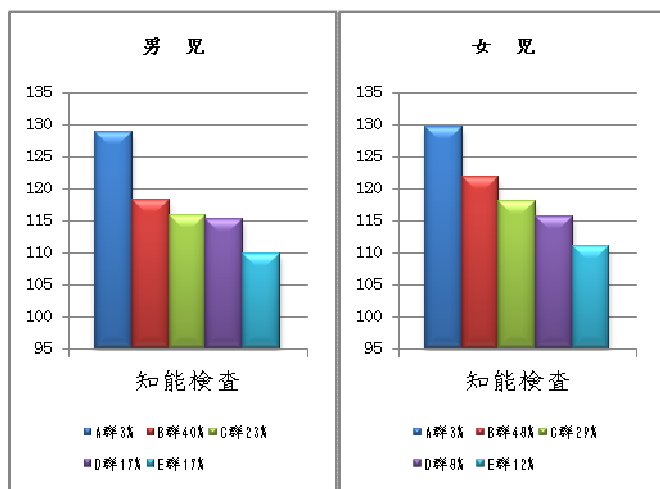
- (2) 平成20年～23年までのA群～E群の分布表・語彙と知能検査のグラフ

【A群～E群の分布表】

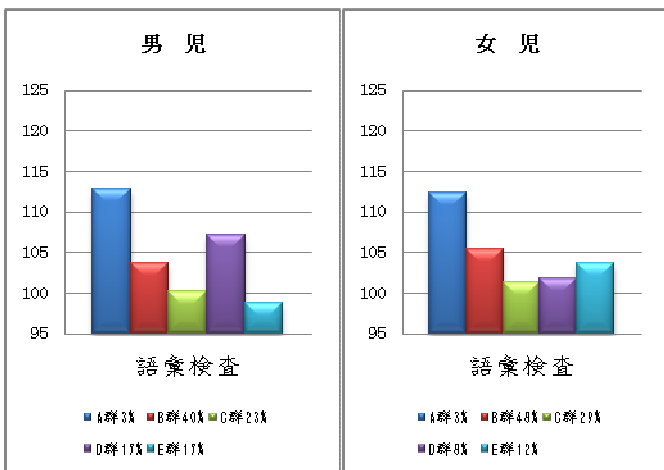
- A群：4種目以上平均を上回っている子ども
- B群：2種目以上平均を上回っている子ども
- C群：ほぼ平均に近い子ども
- D群：2種目以上平均を下回っている子ども
- E群：3種目以上平均を下回っている子ども



【運動能力検査と知能検査】



【運動能力検査と語彙検査】



① 読み取りと取り組み

A 群は全体の 3% であり、知能・語彙指数ともに高い傾向にある。実際、仲間の中でリーダー的存在である。クラスや学年の集団を育てる上で、リーダー性を発揮するよう導きたい。

B 群は男女共に 40~48% とクラスや学年の大半を占めている。語彙指数・知能指数共に A 群に準じて高い傾向にある。この群の子ども達は、日頃の様子から運動することの意欲が感じられるので自信や向上心に繋げる援助を心掛ける。

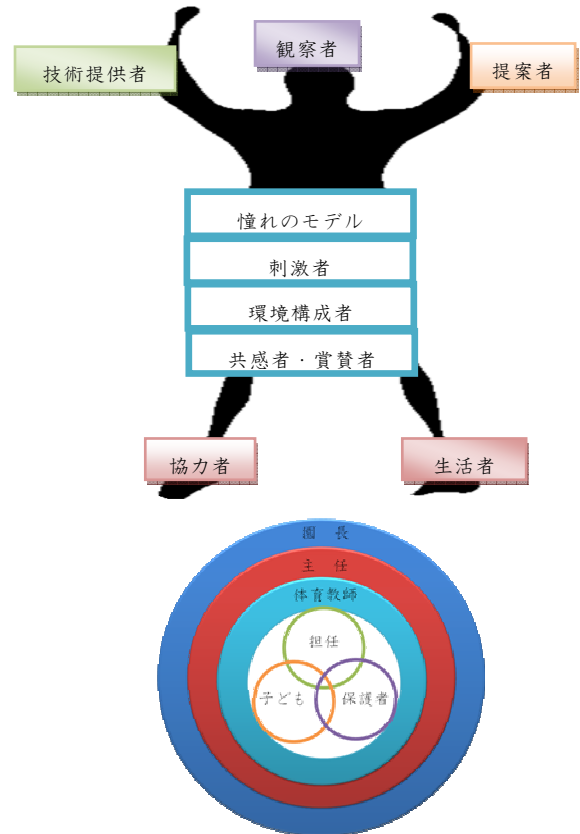
C 群の割合は、予測では一番多い群と思われたが、少ない傾向にあった。運動面において日常での経験の差が顕著に表れているようだ。生活経験の確認をする、指標のひとつと考えられる。

D・E 群がこの 2,3 年でも増えている傾向がつかめる。やはり、経験不足による、身体の動きの獲得が遅くなっている実態がみられる。

この中で個人の取り組みを見ていると、運動能力は低くても何度でも挑戦したり仲間とのやりとりを楽しんだりする子どもは 5 月~11 月の伸び率が大きい。そうしたことから、幼児期は、気持ちの持ち方次第で伸びていく可能性がある。運動好きの子どもの育成にはどのような援助が必要か改めて考えるきっかけとなる。

5. 体育教師の役割

【体育教師としての資質】



(1) 体育教師の役割

① 全クラスの子ともと関わるうえで、3 学年

の発達の見通しのもと第3者の目で広く育ちを見つめる。担任以外の特別な存在として、子どもの刺激となる温かく・メリハリのある指導と魅力ある環境構成をする。

- ② クラスや個人の状況をとらえて担任と話し合いを重ね、育ちの方向性を共有して援助や方法をコーディネートしていく。
- ③ 保護者に対しては客観的データを可視化して伝え、実態を知らせると共に子どもの運動のとらえ方や具体的な工夫を情報提供していく。 (価値観・実態の共有)

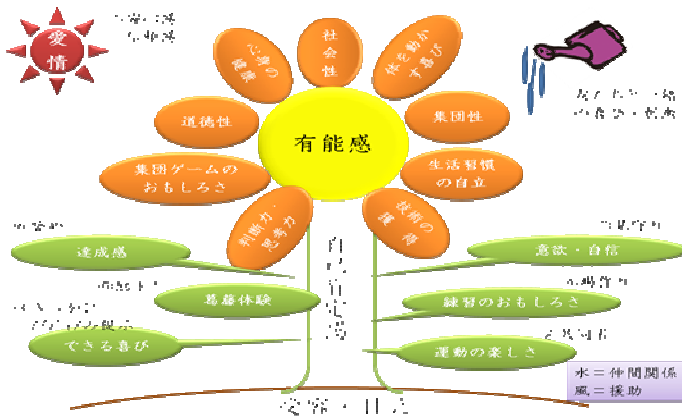
6. 現代の子どもに必要な力を育てるために

子どもの心身の健康を考えるとときのキーワードが自己肯定感と有能感となっている。

幼児期の運動能力は、保護者にたっぷり受容されているとどんな群に属していても、意欲的に活動に参加し楽しめる。

日頃の人間関係の中で、親と子ども 教師と子ども 子どもと子どもの信頼関係が基本になることは勿論である。それに加えて意欲の根底には自己肯定感があり、その後様々な経験を通して自信をつけ、有能感が得られる。

そのために必要な環境は前出として(取り組み事例)あげたもので、援助と育つ力は下記の図に表した。



個の有能感	集団の有能感
・難しいことが出来てうれしい	・友だちと一緒にできる喜び
・「自分は出来るんだ」という自信	・友だちと競争して勝てる喜び
・「出来た」というだけではなく、できるまでの過程を理解して出来たという達成感。	・友だち・教師・親から受け入れられているという安心感。そして、友だち・教師・親から認めてもら

・「ここまで出来る！」という思いと、それに向かう自分の良さ。	える自信。
・「努力すれば出来る！」という自信。(練習)	・教え合い・認め合い・励まし合いからの自分や仲間との良さの発見
・自分で目標(自己課題)をもち、達成した時の満足感。	

7. まとめ

(1) 子どもの運動は、自発的に遊び・生活する中で各器官を動かして発達させている。気持ちのもちようで技術も獲得でき、生涯にわたる運動への意識を育てる上でも大事な時期と考える。

子どもの育ちには、信頼感と安心感をベースにして子どもが自己肯定感をもっていることが一番大事な土台となる。加えて運動能力に関しては有能感があると新たなステップへの意欲に繋がる。

(2) 当園のデータでは、運動能力が高い子どもはこの時期に於いて、5領域にわたってしなやかに育っていることがわかる。(言語力、知能、コミュニケーション力、表現力、など)これは、保護者や教師の受容が基盤となって、伸びようとする力が発揮されているものと考えられる。

(3) 温かい人間関係の中で育つと、安心して挑戦したり、失敗したりできなかつたりしても励ましを糧に頑張る力に繋がっている。よって、子どもに携わる教師や保護者が信頼と共通理解のもと接することが望ましい。それには、成長の方向性や賞賛の仕方・タイミングを理解するという連携が重要である。

(4) 幼児期の子どもに関わる大人は、子どもの応答者であり、環境構成者である。一緒に遊べる場や時間の保障、子どものモデルとなり一緒に遊び心に寄り添って励まし、誉めていくことが大切である。

(5) 意図的な活動場面では、子どもの発達や興味に見合った活動内容・環境を準備する。そのために必要な教師の資質は、観察力・幼児発達理解・専門知識・感受性があげられる。子どもの心身の育ちのために、時には技術を、時には心情を巧みに融合させ現代社会で失われつつある子どもの、いや人間の基礎的な運動能力の獲

得と、健全な精神が育つよう努力していきたい。